

初教 かわらばん

KAWARABAN

第4号 2002.7.19

広島文教女子大学
教育学会
発行

面白セミ紹介 川西正行セミ

レポーター加納 ゆかり(19期生)
みなさんこんにちは。体育専修川西セミ4年の加納ゆかりがレポーターをこめまします！

川西セミには私の他に、何があっても大きな口をあげて笑っている小野川さゆり、いつも誰かがよりワンテンポ遅れている黒崎裕美と、文教科リーダー部長の竹丸のぞみがいいます。



ゆかり、小野川さん、川西先生、加納さん、黒崎さん、竹丸さん



私がお酒が弱いせいで、調子にのって飲み、その日の帰りは、広島駅に1時間滞在して酔いを醒ましたこともあります。今ではいい思い出です。みなさん「悪飲み」はやめましょう！

川西先生は、大の板豆好き。飲み会の席では自分の目の前に板豆が無いと、小学生の男の子のようにいじけます。(困ったものです...)。そして、ちよっかいを出しにいくとすぐ板豆の皮をとばしてきます。優しく扱すると、板豆を投げて食べさせてくれます。学生の方も食べさせてあげます。

.....とまあ意味の分からない関係ですが、まじめな時はまじめです。[は]はける時は思い切りは[は]け(ハカ騒ぎをして)、真剣な時はいつもの自分が喋るように「頑張る」ことが私たちのモットーなので。そして、いつも笑い、笑顔を絶やさないことですね。

真の学びの場へ



学科長 金舛 俊作

最近の車にはカーナビが設置されている。便利な世の中になったものである。文字面に触れるだけで行く先を決めてくれる。例えば、「5ルートにタッチすれば希望のルートが選択できます」と親切に案内してくれる。ある日、「距離優先」にタッチして運転を始めた。時間が短縮できると考えたからである。

生徒たちの反応はさまざま。解かないといけないのですかと不満を述べる者。変な問題だなあと言いつつもしぶしぶ考えている者。一生懸命問題に取り組んでいる者など、十人十色であったそのうちである。C君は、翌日次の事を生活日記に書いてきた。「先生が出された問題(X,Y,Z)とあるという問題が分からなかった。クラブ活動へ出るのをやめて考えたのに、学校では分からなかった。家に帰ってじっくり考えるとようやく解けた。その時の気分の上からいって、最後まであきらめず、考えるのはよいことだ。...」

平成14年度

初教スタッフ(五十名)

- 新校 藤原 比呂志
- 有馬 比呂志
- 船田 ひとみ
- 浴野 雅子
- 岡 利道
- 金舛 俊作
- 金本 満利子
- 川西 正行
- 河村 裕子
- 神原 雅之
- 黒柳 宏義
- 小西 忠男
- 佐伯 育郎
- 入間文化学系(より)
- 新宅 雅和
- 杉山 浩之
- 田頭 雅和
- 田村 進
- 徳本 達夫
- 原田 正治
- 山下 典章(新任)
- 村上 美佐子(人間福祉学系より)
- 吉田 裕午
- ※前年度退任者
- 秋山 幹男(心理学系)
- 伊藤 裕慶(香川大)
- 東 由水校(広島大学経済学)
- 田頭 雅和(編集長)
- 岡 利道(副編集長)
- 金本 満利子(初教14期生)
- 山田 悦子(初教14期生 担当担当)
- 河村 裕子(初教16期生)
- 小村 瑞与(初教20期生)
- 小野 由美子(初教20期生)
- 永見 千尋(初教20期生)

金舛監督
単なる個性派軍出
中国地方だけでなく
東海、近畿や九州
そして東北、四国の
出身者もいます。

何とも
たのもし
仲間たち

「初教かわらばん」投稿のご案内

会員の皆様の投稿により、本誌はより充実し、より楽しいものになります。投稿を、心からお待ちしております。次の要領で、どしどし原稿をお寄せ下さい。

なお、掲載分につきましては、編集委員会より薄謝をお送りします。

- 文量 800字以内(手書き、ワープロどちらでも)
- 写真 1~2枚(様子がわかるもの)
- 送り先(郵送の場合)
〒731-0295 広島市安佐北区可部東1-2-1 広島文教女子大学人間科学部初等教育学科「初教かわらばん」編集委員会
- 送り先(電子メールの場合) toka@h-bunkyo.ac.jp

編集後記

「いやー、今回はどうとう海外口ができたね。」
「センセー、九州も海外なんですかの？」
「元読、元読(笑)。山田さんが福岡の柳川へ取材に行ってくれて、カントよかったです。」
「彼女は多分ですからね。でも、親友と両会できて、スリッパ履きました。」
「来社直感では、もっと遠くへスキャンを派遣するかな。」
「北海道あたりかな?..なんて噂も出てますが。」
「うーん、誰を派遣するかもモメましたね。」
「卒業生名簿を必死にめぐりながら「えーっとオ、ハワイに住んでる卒業生はいないかな?」
「ちよつと、ちよつと、何やってんの!..それはいいからいい。」
「...でしたか(苦笑)。ひとまず、第四号の完成、よかったですね。」
「それで、やっぱりこれからは編集長は僕が...」
「あつと、こちらから話を出す前に、これは、ありがたいです!」
「そのかわり、スタッフのみんなに責任をお願いしたいな。そして、会員のみなさんの投稿も是非!」
「ヨロシクお願いします。」



突撃レポート!

小学校の先生になつてよかった

瀬高町立大江小学校教諭
梶島由紀子さんを訪ねて

今回の突撃のレポートは、初等教育学科14期生(国語専修)の梶島(かば)由紀子さんです。同じ国語専修で同級生でもあった私、山田悦子がレポートします。

平成14年5月27日(月)、福岡県山門郡瀬高町にある瀬高町立大江小学校に取材にいきました。前日から福岡入りしていた私は、約5年ぶりに梶島さんと再会を果たしました。取材時間は、朝の会から給食時間までの約4時間でした。朝8時に梶島さんに案内され、学校に到着しました。

早速校長室に案内されて、古江校長先生にお話を伺いました。「ゆつこ先生は、大変熱心な先生です。」と語られました。その他朝のお忙しい中、学校の環境や学校完全週5日制の実施の状況などについて話していただきました。教頭先生やほかの先生方も「ゆつこ先生は若くてとても元気な方です。周りの方々にも気を配り、とてもがんばり屋さんです。なんといつも生き生きと生きているんですよ。」と口をそろえられます。

1、2時間目は国語の時間でした。「砂漠に挑む」という説明文の学習です。テキパキと授業をすすめる梶島さん。児童一人ひとりの様子を見ながら、授業をすすめていきます。



国語の授業が終わって、児童のみならず、先生にもお話を聞きました。「梶島先生はどんな先生ですか?」という質問に、「おもしろいけど怖い!」広島で暮らしていた話を

先生になつて感じることは、「先生になつてよかった。先生ついでいいなと思います。1年間子どもたちと接することで子どもたちの成長がみられる、そこがいいんです。」と笑顔で語られました。

お忙しい中、いろんな話を聞いて、私自身とても勉強になりました。同級生として負けなパワーをいただきました。

ありがたう、かばちゃん。これからもガンバロウね!!

